

論評の視点 3

メディアと子どもと絵画表現

—現代という時代のラフスケッチとして—

山木朝彦

YAMAKI, Asahiko

鳴門教育大学 教授

■プロフィール

1955年東京生。横浜国立大学大学院（修）美術教育専攻美術科教育専修修了。大分大学助教授を経て、現職。

■専門領域・研究主題

美術教育学

現代の美術の動向と美術教育思想を繋ぐ視点を模索。教育実践にかかわる研究としては、鑑賞教育の多様なアプローチについて紹介と考察を重ねている。

■主な著作・作品など

著書:「美術教育と教育を結ぶ基底としての子ども論」「日本における児童画の問題」(宮脇理・花篤実編『美術教育学』建帛社1997所収32-54頁、71-103頁)、「戦後の表現教育思想の一断面」(宮脇理編『4本足のニワトリ—現代と子どもの表現』国土社1998所収49-76頁)、「近代日本における表現論の展開と美術教育」(宮脇理編『緑色の太陽—表現による学校新生のシナリオ』国土社2000所収23-44頁)、宮脇理・山口喜雄との共著『<感性による教育>の潮流』国土社1993、「美術教育と批評」(柴田和豊編『メディア時代の美術教育』国土社1993所収、155-182頁) 編著『美術鑑賞宣言—学校+美術館』日本文教出版、2003、分担執筆『セルフ・エデュケーション時代』(フィルムアート社、2001) など多数

論文:「ローウェンフェルドとビューラー」(『美術教育学』11号、1990)、「子どもの美術とプリミティヴィズム」(『大学美術教育学会誌』26号、1994)、「美術教育と美術の隠された関係性の探究」(『アートエデュケーション』29号、1999)、「テイト・ギャラリーの歴史及びその変貌と教育機能の現代化」(『大学美術教育学会誌』38号、2006)、「美術教育思潮におけるリアリズム表現の受容とその問題点」(『美術科教育学会誌』29号、2008) など多数

科学研究費:「美術館と学校が連携して進める美術鑑賞教育の実践的方法論の開発」(研究課題番号:16530599)「英国テイト・ギャラリーの教育普及活動における学校連携の方法と成果」(研究課題番号:22530984) 等

■社会的活動 (現在)

「せとうち美術館ネットワーク」アドバイザー

「大塚美術財団」評議員

■E-mail yamaki@naruto-u.ac.jp

1. 基本的な立場

(1) テイト・モダンの展示方針からの示唆

すでに遠い過去のように思われるミレニアムに開館したテイト・モダンには、過去と現在の美術動向を踏まえ、その両者の強度を高めたことで、劇業でありながら、中和され安定した組成を目指すかのごとき、新規のジャンルによる展示の括りを措定した。すなわち、「風景/事物/環境」(Landscape/Matter/Environment)「裸体/行為/身体」(Nude/Action/Body)、「静物/対象/実物」(Still Life/Object/Real Life)、そして、「歴史/記憶/社会」(History/Memory/Society)である。おそらくは、深慮を尽くした果てに、Matterは事物、Real Lifeは実物と訳されているのだろう。(五十殿ひろ美訳)

それにしても、原典が2000年、翻訳書が2002年に出版された『テイト・モダンハンドブック』(註1)にあるこの括りは、原文も翻訳も、実にそっけなく即物的である。

「1970年代の「美術史の終焉」と呼ばれた現象は、抽象絵画を経て純粋な視覚性へと向かう進化論的なフォルマリズムに依拠していた「絵画の歴史」にも終わりをもたらした」と総括する永守基樹の認識に従えば、「絵画の歴史」ではない地平の標識をこの括りは表している。

テイト・モダンは、このような括りにした根本的な動機を隠さない。「美術を社会史や文化史とつないで、思想や社会状況というより広い文脈のなかに位置付けることができないだろうか。美術作品制作の背後にある材料や概念の生成過程を展示することはできないだろうか。芸術運動や年代を超越したテーマや傾向を見つけ出すことができないだろうか」(執筆時、企画展示部長Iwona Blazwickと収蔵部長のFrances Morris共著部分)(註2)

2011年にテイト・モダンが企画したホアン・ミロの大回顧展は、まさに広義のモダニズム画家のミロのイメージを政治思想史の文脈に再配置する試みであり、上記の志向性を突き進めた展示だった。たしかに、永守が言うように、「近代絵画に横溢する創造性や個性、革新や根源への志向」が招く閉ざされた文脈から解き放たれた画家は、自らの身体性と不可分な個性的な線や色彩を生み出す画家としてではなく、考える思想家、複雑な政治状況のなかで呻吟しつつ発言する画家として読み替えられたのである。

大きな物語のモダンが終わり、趣味的で偏執的な私的関心を表すイメージが無秩序に広がるポストモダンの世界が始まったわけではない。むしろ、ポストモダン批評の登場によって、アートの相貌が異なって見え始めたのである。

(2) メディアに浸潤された子ども

ずいぶん昔、美育文化誌の特集「かわいいのありか」という号に、シンディ・シャーマン(Cindy Sherman 1954-)の言葉を伊藤俊治の文章から孫引きしたことがある。現代における子どもの絵画表現の可能性と限界を考えると、それをもう一度振り返りたいという欲望に駆られる。

「一日中、テレビを見ていても飽きない少女で、テレビを見ながらスケッチ・ブックにテレビ映像の残像を何枚も何枚も描き散らしていた。」(註3)

1950年代半ばに資本主義国に生まれた者には、洋の東西を問わず、テレビをはじめとする商業的な映像メディアが自らの児童期を眩しく彩っていたと振り返る者が多い。現在、テレビは、子どもを取り巻く視聴覚メディアのなかで、その頃のような特権的な位置を占めてはいないが、これと入れ替わるように、YouTubeやテレビ・ゲームの動画が子どもの心的世界に大きな影響を与え始めている。

もちろん、漫画、キャラクターグッズ、雑誌、ポスター、映画などからの影響も子どもは免れない。子どもにとって、対象がキッチュなのか、ハイ・カルチャーなのかという問いは基本的に意味を成さない。そうした文化的背景について文脈的な理解を持つに至るには時間が必要である。

シャーマンがそうであったように、視聴した映像や好んで見た画像のイメージは、それを構成する色や形、そしてテクスチャーが記憶され、身体的な身振りとして内在化される。論者は、かつて、評論的考察のなかで、「彼女[シャーマン]はテレビの画像がどのように人の視線を引きつけ、操作するのか考えていたにちがいない。彼女の作品に漂う濃厚なエロティシズムが鑑賞者の視線を誘導し操作する緻密な計画の下に生まれていることをこの逸話に重ねてみて欲しい」(註4)と書いたが、そのようなベクトル、つまり、享受する側の好感度を意識して、自分及び創作物を表現するというベクトルは、日本の子どもと青年の絵画表現に根深く浸透していると言えよう。

ミッフィーやサンリオ、そして、ディズニーのキャラクターに似た誰の目にも「かわいい」という印象を与える表現は、学校美術が「描き手の知性と内面世界の叙情性を測り、芸術へと接合する装置である」と子ども達が自覚するまで続くのである。いっぽう、自分自身をどのように蠱惑的に見せるかという現代の校外学習は、誰もが「美人時計」(株式会社 美人時計のWeb広告)のモデルになり得る程、日本の社会では、磨かれ、洗練されることになる。しかしそれは、シニカルな自己分析を媒介にしている。

2. 感受性と見ること

(1) ポスト・モダンと批評への道のり

VTS (Visual Thinking Strategies) を発案した者として有名になった元MoMA勤務のヤノウィン (Philip Yenawine) は、モダンからポストモダンへの展開を連続的に捉える優れた解説者でもあった。それは『モダンアートの見方』(原著How to Look At Modern Art 1991)に結実している。タイト・モダンがそうであったように、MoMAもまた、モダンとポストモダンを接合するロジックを必要として証である。もちろん、総体としての「ポストモダン」とはいったい何なのか。このイ

メージの消費への傾斜を促した社会背景は何なのか、という問題は残るが、ここでは示唆的な論文の指摘(註5)に留めたい。

そのうえで言えることは、イメージの消費回路は多種多様なメディアを通じて拡大し、メディアの特性とコンテンツに浸潤される思考と身体という私たちの状況は、不可逆的に進行するということである。まさに、Environment、Body、Real Life、Societyを貫流し環流するイメージの連鎖が昂進してゆく事態を目の当たりにしているのだ。そうした消費されつつ変容を続けるイメージの流れを捉えるには、表現と社会を結ぶ問題群に対する批評性が、美術教育研究に求められている。

(2) 今、必要な絵画のための基礎理論

たしかに、子どもはイメージを消費する存在であると同時に、きわめてプロダクティブな存在である。その生活世界の文脈から物事を意味づけ価値づけて、ある種の批評力までも獲得している。そうした、けっしてプリミティブでもイノセントでもないプロダクティブな存在が、都市化された社会に氾濫するイメージの只中であって、どのような絵画表現を生み出すのであろうか。

このことは教授 - 学習過程の等価性を前提にしたカリキュラム立案という課題に先立つ私の関心事なのである。

しかし同時に、私たち美術教育に関わる者の切実な現実感から言えば、自らもまた参与観察的な場へと踏み込み、学習者との積極的なディアレクティクを試みる必要を感じている。そのとき、必要な枠組みに関連して、私はよく知られた二人の研究者の名前を掲げておきたいと思う。

それはローウェンフェルド(Viktor Lowenfeld 1903-60)とアイズナー (Elliot Eisner 1933-)である。ローウェンフェルドは、子ども達の感受性の問題を、アイズナーは、その知覚と認識と思考の関係性のある程度まで明らかにした。前者は「感受性」(sensitivity)を自己と向き合う創造的感性、全体と部分の関係性を見極める知覚的感性、社会的・情動的感性、思考と感情を結びつける審美的感性に分類し、絵画表現を中心に据えたカリキュラムにそれらの発展を託した。アイズナーは視覚の恒常性を突破して物事を認識するための「見る」という行為を強調した。共に、社会的な文脈と子どもの絵画表現の世界を接合しようとした努力の成果である。

- 註
- 1) Iwona Blazwick et al. *TATE MODERN the handbook*, Tate Publishing, 2000
 - 2) 上記の翻訳書『タイト・モダン ハンドブック』ミュージアム図書、2002
 - 3) 山本朝彦「『かわいい』の行方:アダムスたちの彷徨 - メディア環境と自己表現の関係」、美育文化、1996年11月号
 - 4) 前掲
 - 5) 藤本一勇「ポストモダニズムの光と影」、現代思想(特集:ポストモダンとは何だったのか)、2001年、11月号